

やっとの「対話」が、またもや「延期」

渡辺美奈 (wam)

前号の『wam だより』(Vol.59)で、ユネスコ「世界の記憶」への日本軍「慰安婦」記録の登録申請に関するこれまでの経緯、そして「対話」が年内にも行われるとお伝えしました。会員のみなさまからはあたたかいカンパをいただき、本当にありがとうございます。

「対話」は、〈「慰安婦」の声〉として登録申請している私たちと、〈慰安婦と日本軍の規律に関する文書〉として登録申請している歴史修正主義者との間で実施するよう、2017年にユネスコが勧告したもので、今年7月に実施される予定でした。しかし、その「対話」が延期されてしまいました。この間の動きを報告します。

* wam ウェブサイトにあるユネスコ「世界の記憶」関連リンク集もぜひご覧ください

「対話」のための準備

wam も参加する「日本軍『慰安婦』関連記録をユネスコ世界記憶遺産に共同登録するための国際連帯委員会」(以下、国際連帯委員会)の事務団団長の申蕙秀さんのもとに、2月6日付でユネスコ事務局から「対話」を実施するとのメールが届きました。産経新聞の報道から1週間経っていましたが、場所はパリのユネスコ本部、日程は6月10-11日との情報はすぐに8カ国の申請者に共有されました。「予期せぬ事情」によって「対話」は7月17-18日に変更されたとのメールが3月に届きましたが、この夏にやっと実施される「対話」に向けて、国際連帯委員会は着実に準備を進めました。

ユネスコからの「対話」勧告から8年という待機の間に、申請者だった「日本軍『慰安婦』ハルモニたちのための民族と女性歴史館」(韓国)の金文淑さんキム ムンスク、「リラ・ピリピーナ」(フィリピン)のレチルダ・エクストレマドゥラさんが亡くなり、各団体も代表者が替わっていきました。多忙な8カ国の関係者の日程を合わせるのは大変なことで、まずはオンライン会議を開いて「対話」への参加者など必要事項を確認しました。そして、6月下旬にはソウルで対面の会議を開き、事前に届くはずの議題を検討する予定でした。パリでの最終事前打合せをどうするか等々、検討課題はたくさんありました。

「対話」の延期通告

団長の申蕙秀さんはユネスコ事務局に「対話」への参加者最終リストを知らせるとともに、もう一方の、日本の歴史修正主義の登録申請者は参加者リストを出しているか、またファシリテーターや「議題」はどうなっているかを問い合わせました(5月20日付)。すると5月22日付で届いた返信には、もう一方の申請者からは参加者リストが届いていないこと、そして時間が押してきているので次の展開について相談を始めているから航空券の準備などはしないように、とのメールが届きました。その

後の返信も同様で、最終的には、6月4日付のメールで正式に「対話」が延期されたと告げられました。理由として、関係各機関から正式な回答を得るのに約4ヵ月かかり、新たなファシリテーターとの協議や必要な準備を行うための時間的余裕が不十分なこと、そしてユネスコ(および国連システム全体)が直面している予期せぬ、深刻な財政状況があげられていました。

「対話」がやっと実施されることを歓迎し、申請者の日程を調整しながら今後の段取りをユネスコ事務局に丁寧に伝えてきた申蕙秀さんの落胆は大きなものでした。理由もはっきりせず、いつまで延期するかも知らせない対応に、国際連帯委員会の誰もが納得していません。今回で3人目となるはずだったファシリテーターの人はすでに昨年から検討されており、クリスチン・メルケルさん(ドイツ)で合意されており、「対話」に向けた必要な事前協議をしなかったのはユネスコ事務局側の怠慢ともいえます。財政問題でいえば、ユネスコからの支出は限定的で、こういった連絡調整担当者とファシリテーターの人件費と、2日間の「対話」の場所提供程度です。「対話」に参加する申請者は、パリのユネスコ本部までの旅費や滞在費は自分たちで負担することになっており、通訳を必要とする場合は通訳費用も負担します。事務団統括チーム長の韓恵仁さんハン ヘインは、「対話」延期の具体的な理由について12の質問をユネスコ事務局に送りましたが、返信は届いていません。

歴史修正主義団体のウェブサイトから

「対話」の相手である歴史修正主義の団体は4団体ありますが、7月13日現在、延期に関する発信はウェブサイトでは見当たりません。申請者として名を連ねる加瀬英明、目良浩一の両氏はすでに死去しています。あと2人の申請者である小山和伸、山本優美子両氏は、今年1月31日に参議院議員会館でユネスコ「世界の記憶」の勉強会を開催しており、一部公開されているこの勉強会の映像記録を見ると、その時点では「対話」への強い意欲を示し

ています。そこでは、小山和伸氏がパリのユネスコ日本政府代表部で尾池厚之特命全権大使と話した内容を披露していました。曰く、日本政府としては「先延ばしになって立ち消えになっていくのが一番理想的」「両論併記は外務省も一番恐れている」と語ったとのことでした。

(<https://www.nicovideo.jp/watch/sm44615154>, 2025 年 7 月 13 日閲覧)。

「対話」勧告から 8 年、立ち消えになっていくのが一番理想的とは、「慰安婦」問題に対する日本政府の態度をよく表わしています。そもそも「世界の記憶」の取り組みは、貴重な記録を「記録遺産」として登録し、保管や公開を促すことが目的です。「対話」勧告でも「あらゆる関連文書ができる限り受け入れられるよう、共同申請につながることを目指す」ことが目的と明記されています。「記録」の解釈は歴史家に委ねるとしても、「記録」自体は両方とも貴重なものであるから、両方とも「世界の記憶」として登録して、解釈や主張は「両論併記」する、それは一つの選択肢です。しかし日本政府は、いかなる方法でも「慰安婦」に関連する記録が「遺産」になること、それ自体を「一番恐れている」というのです。政府が公式にはしない発言を、歴史修正主義団体は堂々と公開してくれたといえます。

また、山本優美子氏の「なでしこアクション」のウェブサイトでは、韓国の李在明大統領が選挙期間中の 5 月 28 日に出した公約に「国家次元での日本軍『慰安婦』記録物のユネスコ世界記憶遺産登録推進」とあったことを取り上げ、「日韓合意違反」であるとして大々的に批判しています。「日韓合意」そのものの問題点の指摘は省きますが、日本軍の「慰安婦」として性暴力被害を受けた女性たちの記録を残すことは、非難でも批判でもありません。そもそも「世界の記憶」のルール変更までして「慰安婦」記録の登録を「国家次元」で阻止してきたのは、日本政府なのです。

もう待てない！

「対話」は延期されたものの、6 月 25 日には小規模で国際連帯委員会が実施され、韓国、中国、東ティモール、インドネシア、日本の申請関係者がソウルに集いました。

基本的な報告を受けた後、中国人「慰安婦」裁判の弁護士として尽力してきた康健^{カンジェン}さんの第一声は「もう待てない」でした。日本軍の「慰安婦」として被害を受けた女性たちは多くが鬼籍に入っており、中国でもご存命の被害女性はわずか。「日本軍『慰安婦』の記録を世界の記憶に」と願う女性たちの声を届け、これまでのユネスコの対応に抗議するためにユネスコ本部へ押しかけよう！ 粘り強く「対話」を実現する道を探ってきたが、もう堪忍袋の緒が切れた！ 忍従から怒りモードへの変化です。これまでユネスコの指示に従って「非公開」の原則を守ってきましたが、日本の歴史修正主義者たちは様々に自分たちの都合のいいように情報を垂れ流している、その状況への怒りも共有されました。

一方で、その後に行われたユネスコに詳しい専門家との会合では、違った観点から意見が出されました。ユネスコの事務局は、基本的にユネスコ加盟国の意向を重要視するのであって、NGO の意見には影響されない、だから NGO がパリに行っても効果がない、というのです。

今年の 8 月 14 日の日本軍「慰安婦」メモリアル・デーは、このユネスコ「世界の記憶」をめぐる 3 人のゲストによる報告やパネルディスカッションを準備していましたが、これも延期せざるを得ませんでした。日本政府の圧力があったとはいえ、「対話」勧告を出したのはユネスコです。国連の機能低下が著しいなかで、ユネスコで働く心ある人たちに、軍隊による性暴力の記録を「世界の記憶」にする意味をどう伝えられるのか。市民社会の知恵とアイデアが求められています。